英語テストのストラテジー　（1）

高　橋　　守

はじめに

本稿では、実用英語技能検定試験（英検）やTest of English for the International Communication（TOEIC）などの英語能力試験（proficiency test）のための方略について考察し、なおかつ英語能力試験を攻略するための日頃の対策として、どのように英語力を高めるための学習指導を行ったらよいのか提案を行う。

英検の１次試験の問題形式には、A.英文読解問題、B.英作文の整序問題、C.語彙・文法を問う空所補充問題、D.聴解試験の問題がある。本稿では、それぞれの問題形式毎に用いられる方略について述べる。

英語能力試験のための方略とは？

方略とは、英語で表現するとstrategy である。通例strategyとは戦略のことであるが、英語教授法では方略という言葉を用いるのが一般的である。試験を受けるための勉強の方略について本稿で取り上げる理由は、次の通りである。

（1）英語の学習方略として学生にどのようなものを教えたらよいのか、という問題が、昨年からの懸案事項になっていたこと。学習方略を見つけるには、試験方略を検討するのも一つの方法と考られること。

（2）現在、授業を通じて一般の大学生が受ける英語能力試験の対応の方法を指導していること。

（3）現実には、英語力が技能に分割されて試験されていること。従って、技能毎に方略を検討しなければならない実情であること。英検合格者で英語が話せない人間は大勢いるし、逆に英検に合格しなくても英語の話せる人間も沢山いる。このことから、本当の英語力というのは、試験だけで完全に測定できるものではないということが言えるであろう。しかし本当の実力が測れているのかどうかは別の問題として、現実には、過去何十年にも渡り英語能力試験によって受験者の英語力は、文法、語彙、綴りのような構成要素の集合体とみなされ、聴解、会話、読解、作文という４つの技能に分けて試験されてきた。従って英語テストの方略は個別の技能ごとに検討することが必要なのである。

英語能力試験のための学習の方法と試験がどのように構成されているかを、教員が学生に対して教えることには意義がある。英語能力試験のための方略を研究することのメリットは、教員にとっては、単純な英文和訳や答え合わせの授業から脱却するきっかけを掴むことになろうし、学生にとっては試験に合格する可能性が増えることになるのである。

英語能力試験の難易度と問題の種類

筆者が本学の授業で指導を試みているのは、学生達に英検２級と英検準１級レベルのテストに合格する英語力をつけることであるが、これらの英語能力試験は、単純に単語力と文法力と読解力と聴解力があれば高得点が約束されるものではない。テスト問題を詳細に検討して行くと、テス

ト問題作成者が受験者に対して様々な高いレベルの思考力を要求していることに、気づかされる。例えば聴解力の試験の場合は、聞き取った内容を、その内容に合う答を選択肢から見つけ出すまでの短時間の間だけ覚えておく記憶力が、求められる。そして、選択肢から答を見つける集中力と忍耐力が求められる。受験者に1番から3番までの選択肢を読ませて翻弄しておいて疲れさせた果てに、正解が4番の選択肢であるというような場合も珍しくはない。このような場合は、問題作成者は精神的に疲労した状態での受験者の思考力を試しているのではないだろうか。次の表では、英語能力試験問題の難易度レベルと、それがどのような種類の問題であるかについてまとめてみた。学生を指導する時には、英語能力試験の問題を解くことは、各自の知識が単純に試されているのではなく、その試験を通して思考力をテストされていることに、注意させるべきである。特に問題形式に熟知させた上で、どこのあたりに注意を払って解答を探すべきであるかについて教えておくと、受験者の励みになる。例えばTOEICのPart Iの問題は、写真を見ながら何をしているところかを選択肢から選ぶ問題である。男性が1人で写っていた場合に、受験者はその男性に注目して解答するが、多くの人物が写っている場合には個々の人間に注目するのではなく、その集団がやっていること（会議だとか自転車レースとか）に注目して焦点をあわせるように、指導すべきである。

（問題の難易度レベル）	（問題の種類）
難易度が低い	・短い答を要求する ・使用頻度の高い語を答として要求する ・答を出すための焦点が合わせやすい ・問題に使用されている文が簡潔で理解しやすい
難易度が高い	・長い答を要求する ・使用頻度の低い語を答として要求する ・答を出すための焦点が合わせにくい※ ・問題に使用されている文が長く複雑で理解しにくい
※例えばTOEICの Part One 写真問題で、あまりにも多くの物や人が写真に写っている場合には、受験者はどこに焦点をあてて答を探したら良いのか分からなくなる。	

以下では、各問題形式毎に適切な方略と勉強の仕方を検討する。

A.英文読解問題のための方略

英文読解試験の問題形式

クローズテスト：英文を読み空欄に単語を補充させる形式。この形式はクローズテストと呼ばれている。空欄に入る単語が4個程度の選択肢に分けて用意されている。

内容把握問題：英文を読ませた後で、その英文の内容に関する質問が出され、その質問に対する解答を選択肢から選ぶ形式。

これらの形式は、英文の理解度を測定する上で妥当な試験形式である。筆者は、英作文の能力を測るための整序問題を英文読解の試験問題として定期試験に出題してしまった経験を持つ。その結果は、当然のことながら大方の学生の正解率が非常に低かった。やはり英文読解力の試験としては、クローズテストと内容把握問題が、現実的には最適であると考えられる。なおTOEFL（Test of English as a Foreign Language）は、従来のペーパーテストからコンピュータを操作し

ながらのテストへの移行過程にある。現在までのところではコンピュータ版の問題は、ペーパー版から派生した範囲内に留まっているように思われるが、このコンピュータ版のTOEFLは、英文読解試験の形式を大きく変化させる可能性があるので、これからの動向に注目して行きたい。

英文読解問題の攻略法

出題される問題文毎に丁寧に問題を読んで解答してゆくのが、一般的な解答の仕方であるが、試験問題作成者側の視点による問題作成の法則に習熟することで正解に近づくことが可能である。詳しくは高橋（2002）を参照のこと。

英文読解問題を攻略するための日頃の対策

スティーブン・クラッシェンの英語教授法（＝英語学習法）であるナチュラルアプローチは、今ではいささか古くなった観は否めないが、未だにかなり人気があり、大勢の支持を受けている。クラッシェンは、The Natural Approach で英語学習者に対する追加的なインプットとして、次のようなやり方を提唱している。筆者が、実際に英文講読の授業の中で、クラッシェンの説く干渉的および非干渉的な英文読解指導を行ってみたところ、学生のテキスト理解が大変に深まった。以下は、クラッシェンの説く英文読解の指導法である。

干渉を行う場合の英文読解指導

学習者に対して干渉する必要があるのは、次のような場合である。

（1）難しいテキストを解読することが、唯一の読書体験というような学生に対して。

（2）リーディングのスキルを持たない学生に対して。

干渉を行う場合の具体的な指導の仕方

1．物語や記事で特に大切な場面において、次に何が起こるか予測させる。

2．読む前にプレリーディング・クエスチョンを出して、重要な点に焦点を合わせさせる。

3．クローズテストを利用する。

4．テキストの中の情報と外界の情報の両方を、利用する。
（例えば、イラストや見出しを利用して記事の内容を理解する）

5．言葉の意味を推測させる練習を行う。
（例えば、John got out of his car and walked up the long pathway to the house. の中のpathwayという語の意味を解説する。英語で行う。）

6．silentlyという語の用いられ方について、解説する。

7．文のコンテキストの説明をする。

8．文の意味を推測する際に、学習者が間違ってしまうことはよくあることである。このため学習者の不安を取り除く必要がある。

9．広範囲に渡る読書に加えて、読解の方略を指導することには効果がある。

干渉を行わない場合の英文読解の具体的な指導の仕方

1．適切なテキストを選ぶ（幾分なじみのある題材にする）

2．指導者が学習者に出す理解のための質問は、スキミング、スキャニングなどのスキルを学習

者が使って発達させることができるようにするためのものである。

3．全ての細部に渡る質問を作成することは、結果的に学習者をテキストの中心的な意味から反らせてしまうことになる。

4．詳細すぎない質問を作成するためには、一度テキストを読んでから（テキストを見ながらではなく）頭の中でその文の大体の感じを表していると思われる質問を作ることである。

C.語彙・文法を問う空所補充問題の方略

文法問題に対する方略

文法問題は、例外もないわけではないが、殆ど学校文法と呼ばれる程度の問題が出題されるので、高等学校卒業程度の英文法に習熟しておくことで対策は十分である。個別の文法項目に関する方略は、いずれ紙面を改めて検討したい。

語彙問題に対する方略

語彙を問う問題に解答する時に注意すべき点は、もしも意味がはっきりと分からない単語が出てきても、冷静さを保つことである。英検もTOEICも四つの選択肢から一つの解答を選べば良いだけである。受験者がそこで試されている能力は、知識としての単語の意味だけではない。解答する時には、消去法を用いながら判断力を駆使して問題の解答を探すことも、大切である。

語彙の大きさと学習レベル

語彙の問題は、テストのレベルを左右する大きな要素である。日本の中学校卒業レベルでは、数千語を習得していることになっている。更に高等学校卒業レベルとして、その上に数千語を習得していることなっている。従って大学生は、原則的には既に5000語（辞書の見出しとして出ている語を一つ一つ数えたものとしての5000語）程度を習得してきていると、みなされている。この5000語が、原則的には大学入試レベルである。見出し語で5000語というレベルは、読解力において差が出るレベルであると言われている。

> Laufer（1993）は、イスラエル人のESLの大学生を対象として語彙レベルと読解力の関係を調査した。その結果、被験者の語彙力が3,000語レベル（基本形換算）を境にして、読解力に差が見られた。すなわち、読解力が2,000語レベルと判定された被験者と、3,000語レベルと判定された学習者の間には、読解力において有意な差が認められたのである。（『英語語彙習得論』p.98）

この上に、大学２年修了程度のレベルの英語試験では、更に数千～5000語が加わって１万語レベルとなり、大学４年卒業程度の英語試験では更に数千～5000語が加わって１万5000語レベルの試験となる。ネイティブスピーカーの語彙力は、基本語で１万7000語程度であると言われているので、これを辞書の見出し語で換算すると、この基本語を２～３倍した数の３万4000語～５万1000語位になる。いずれにせよ、実際に英検準１級突破を目標にしている学生には、大学２年修了レベルとして辞書の見出し語で１万語レベルの単語を習得させることを目標に、学習させて行けば良いことになる。

語彙試験のための準備

語彙の対策としては、英語の単語を覚えることが重要である。スティーブン・クラッシェンに

よれば、英文法の学習（原語ではlearning）は、英語の習得（原語ではacquisition）ではないので、そのようにして学んだ知識はコミュニケーションには役立たない。これほどはっきりと英文法の機械的学習を否定されると、機械的な学習は全てコミュニケーションに役立たないと言われているような感じがする。しかしクラッシェンの主張は、文法の勉強ばかりしていても、英語でコミュニケーションができるようにはならないということであって、彼は単語の学習までを禁じているのではないのである。むしろ読書によって語彙を増やすことこそ英語習得の本道であるとしているのである。単語は増やさなければならない。しかし、その増やす方法をどうするかが問題である。クラッシェンは、読書を通じて自然に語彙を増やしたほうが良いと主張しているが、必ずしもクラッシェンに従う必要はないであろう。そもそも日本人学習者は、普通に生活しているだけでは、わずかな量の英単語しか学ぶことはできない。むしろ日本人学習者は、自然な習得から一歩踏み込んで、単語を意図的かつ計画的に学習する機会を持たなければならないと思われる。

英単語の覚え方の方略としてここ数十年間注目されている方法では、スーパーラーニングやサジェストペディアなどのような、脳の働きの研究から提案されている方法が、最良の方略であると思われる。これらは、人間の右脳の持つ能力を活用するやり方である。右脳は視覚的な情報を処理し、左脳は言語情報を処理する。従って英単語を覚える時には、これらの左右の脳の間に回路を作ると有効である。新しく覚える英単語の視覚的情報、つまり目に見えている綴り字を記憶し、その情報とすでに頭の中にあるその単語の発音と日本語訳、あるいは他の英単語での言い換えた表現とを結び付けることで、記憶が完成する。単語と記憶の間に回路を作るのである。

語彙習得のストラテジーとして、『英語語彙習得論』では次のように提案されている。

（1）新しい語と出会うためのsourceを確保すること。
（2）視覚的、聴覚的または両方で新しい語の形のはっきりしたイメージをつかむこと。
（3）その語の意味を学習すること。
・その形と語の意味との関連をはっきりと記憶すること。
・その語を実際に使用すること。

(p.96)

また同書では、さまざまな語彙の指導（＝学習）方法をまとめて次のように要約している。

（1）キーワード法（イメージまたは語呂合わせを用いる）
（2）文脈を利用する方法
（3）意味別のまとまり（関連語／同意語／反意語）活用する方法
（4）単語の意味的ネットワーク（意味地図）などを重視した方法
（5）中核的意味（core meaning）を用いた方法
（6）接頭辞、接尾辞、語幹を用いる方法
（7）統合的な語彙学習システム
（8）その他

(p.62)

この中で最も効果のあるのが、キーワード法（これは、単語をこじつけて覚える方法。例えば、lamentableは、ラーメン食べる「悲しい」人とこじつけると記憶できる）と、イメージ利用の視覚的図像利用法である。また、文脈・例文を用いて覚えることも推奨されている。使える英語

を目指すのであれば、やはり例文と共に学習すべきである。それから、単語の接頭辞、接尾辞、語幹の知識を充実させておくことも、重要である。市場に数多く見受けられる英語勉強法の本に推薦されている学習法では、大概どの方法においても、記憶のためには繰り返し学習することが大切であることが、書かれている。総合的な語彙学習システムはAV機器を活用した英単語習得システムであるが、この場合でも何度も同じ単語に触れる作業を行わせている。

筆者の体験から述べると、これらの主要な英単語習得のための指導の仕方で注意すべき点は、学習者にとって未知の単語とその反意語を同時に学習させることには混乱が伴うということである。初めて見る単語と一緒にそのに反意語を見せられた場合には、多くの学生がそれらの意味を混同し、覚える意欲すら失いかねない。反意語を提示する場合は（提示しないことも選択するつもりで）慎重でなければならない。

D.聴解力試験のための方略

この形式の方略については、紙面を改めて後日詳しく検討する。

おわりに

クラッシェンは、『ナチュラルアプローチのすすめ』で第二言語の適性について次のように述べている。

> 我々は、適性テストによって測定される言語能力は言語学習能力であって、言語習得能力ではないという仮説をたてるのである。適性は学習に関係があり、態度は言語習得に関係があるとする仮定から、いくつかの興味あることがいえる。適性は学習に、態度は習得にと、それぞれ別々の語学力獲得方法に関係があるということである。(p.47)

ここでクラッシェンが述べているのは、英語能力試験の点数が良い人は文法などを学習する能力が高いということであって、必ずしもそのような学習能力のある人が実用的な英語を身につけられるわけではないということである。逆に、英語能力試験の点数が低い人でも言語習得の努力をすることによって、実践的な英語力を獲得できるのであり、英語を積極的に学ぼうとする態度こそが英語力を向上させるのであると、クラッシェンは述べているのである。実際の授業で学生達にこの話しをすると、彼らの大部分が俄然頑張って勉強するようになる。英語能力試験のための方略について説明することが、本稿の目的であるので、ここで英語能力試験の点数が高いことが英語力そのものではなく学習能力を表しているという説をここで紹介するのは、読者の方々には首尾一貫しない議論のような印象を与えるかもしれない。しかし、学習と習得はどちらか一方のみを選択すべきものというよりも、互いに補完関係にあると筆者には思われるのである。英語の文法を学習することと、コミュニケーションの訓練による英会話能力の習得のどちらも、英語能力試験で高得点を取るには必要な要素であると、筆者は考える。仮に言語学習と言語習得のどちらも大切であるということを、数字を列挙して証明してもあまり意味をなさないであろう。むしろ肝心であるのは、どのようにしたら英語の習得と学習の度合いを高めることができるかという課題に答を出すことであると思う。本稿では、英検の試験問題の解き方を中心に英語能力試験の方略について述べることで、どのようにして英語学習指導を行ったら良いのか解明を試みた。英作文・整序問題と文法問題と聴解問題の方略については、次回以降に改めて取り組む予定である。

参考文献

石井辰哉『英語力を上げる実践勉強法』（ベレ出版、2000）
スティーブンD. クラッシェン、トレイシー　D. テレル『ナチュラル・アプローチのすすめ』（大修館、1986）原著は、Krashen, Stephen D., and Tracy D. Terrell The Natural Approach. (Alemany Press, 1983)
高橋守「英語講読授業活性化プラン」『秋田県立大学総合科学研究彙報　第３号』（2002）
田崎清忠（監修）『現代英語教授法総覧』（大修館、1995）
津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）『学習者中心の英語読解指導』（大修館、1992）
Heaton, J.B., Writing English Language Tests. (Longman, 1975)
投野由紀夫（編著）『英語語彙習得論』（河源社、1997）
安河内哲也『おとなのやりなおし英語学習法』（学研、2001）
山田光顕『英語確実に身に付く技術』（河出書房、2001）
吉ゆうそう『英語超独学法』（南雲堂、1996）